老年期における人格の縦断研究

—— 人格の安定性と変化及び生存との関係について ——

下 仲 順 子¹ 中 里 克 治^{1,2}

本研究は15年間の縦断調査より、1) 人格の安定性と変化、2) 生存や死を予測する自我機能と人格特徴について分析することを目的として文章完成テストと Barron の自我強度スケールが用いられた。第1回調査時の対象者は422名であったが、15年間で3度の調査が行われ、調査を完遂した対象者は90名となった。結果1) 人格の変化及び安定性と性差特徴が示された。家庭内の自己認知、対人交流、現在の自己や人生に対する価値における肯定的なイメージは女性が男性よりも多かった。人格上の変化は肯定的な方向と否定的な方向が共に示された。肯定的な家庭イメージは加齢と共に増加した。対人交流での肯定反応は徐々に低下したが、友人イメージでは肯定反応は70歳と80歳間で低下したが80—85歳間では元に回復していた。自己概念の内、過去の自己は加齢と共に肯定反応が増加したが、未来の自己は年齢が上がると共に肯定反応から否定反応に変化した。結果2) 70—80歳間で自我機能を維持していた群は生存率が高く、一方70—80歳間で自我機能が低下した群では死亡率が高いことが示された。また、70—80歳間での自我機能の低下群では、維持群にくらべて他者からみられる自己認知、身体的自己、現在の自己の肯定反応が減少していた。以上の結果から、70歳から85歳の高齢期にかけて人格は発達する可能性があることと、自我機能は肯定的な自己概念の維持や生存に影響を及ぼすことが示唆された。

キーワード：老年期、縦断方法、人格、自我機能、生存

問題と目的

本研究は15年間の縦断調査により、1) 老年期における人格の安定性と変化、2) 生存や死を予測する自我機能と人格特徴について分析することを目的として行われた。

人格が生涯にわたって発達するのか、或いは安定しているのかについて、人格研究分野では古くから興味もたれていた。勿論、これまでに種々の年齢群の人格を同時に比較する横断研究は数多く行われてきたが、そこから示された結果は人格の年齢変化よりも世代差が強調されやすく、真の発達をみようとするには長期にわたる縦断研究から追及してゆくのが望まれていた。

幼児、児童を対象とした人格の組織的な縦断研究は歴史が古く、60年以上も前にカリフォルニア大学の人間発達研究所によるパークレーguidance study、パークレーgrowth study、オークランド growth study が開始された。そして、幼児から児童、青年、若い成人、中年期と縦断調査が伸長していったが、手法は異なるもののすべての研究で測定された種々の人格特性の内、

幾つかの人格特性は年月をこえて安定していたことがみだされている。

次に、成人期、中年期から老年期にいたる縦断研究も最近では成果が次々に発表されてきた。代表的な研究としては Kelly (1955, 1987) の夫婦の人格研究、Leon et al. (1979) の男性の中年期から老年期にかけての人格の安定性と変化をみた縦断調査、Shanan (1985) の中年から老年にかけての人格の加齢プロセスを理解することを目的としたエルサレム study がある。3研究は人格の安定性と変化の両方をみだしているが、いずれも人格の安定性の方が強調されている。

以上のように、人生の前半期における人格発達研究は着々と成果が出されてきたが、高齢期における人格の安定性と変化に着目した長期の縦断的研究は行われてこず、1970年代に入り、65歳以上の人々を対象に9年間の3時点で調査分析されたペンシルバニア study (Britton & Britton, 1972) の成果が公刊された。活動性や幸福感、自己有用感の減少がみられたにもかかわらず、対人関係や社会性に対する満足感では変化がなかった。また、行動の一貫性における個人差がみだされ、人格は固定的ではなく、変化がおこる可能性が示唆された。

ボン縦断研究 (Thomae, 1976) は加齢についての学際

¹ 東京都老人総合研究所

² 現所属 岩手県立大学

的研究として開始され、5年間の追跡調査で測定された人格特徴は安定していた。追跡は更に1981年まで続き、その間に Coping スタイルの10年間の安定性が報告されている (Olbrich, 1985)。

しかしながら、Field & Millsap (1991) はパークレー縦断研究の対象者 (平均年齢 69.0) 群と当時の父母 (平均年齢 82.7) 群を対象に、老年期でも超高齢期において人格が変化するか、安定しているのかを14年間追跡した。Big five に似た5人格特性が確認出来たが、その内、外向性の低下が両群でおこっていること、また、超高齢期 (80 から 90 歳) でエネルギー、知力が低下することが示された。しかしながら、調和性は60代から70代にかけて上昇し、80—90代で維持されることがわかり、高齢期においても発達的な変化があることが注目された。

以上に示した高齢者を対象とした人格研究では追跡期間が5—14年と他世代よりも短い。しかしながら、近年の人口の高齢化により、長生きする人が多くなるにつれて、Field と Millsap の結果のように高齢期においても人格が発達する可能性が考えられ、老年期の長期にわたる縦断研究が期待されている。

本研究は、人格が老年期において安定しているのか変化しているのかを縦断的に調査することをめざして、地域在住の老人 (平均年齢 70 歳) に対して15年間の調査を行った成果である。測定用具は SCT を用いた。

5年目、10年目の追跡調査結果 (下仲ら, 1984, Shimonaka & Nakazato, 1989) では、用いた15の人格変数の内、6変数は変化がみられ、他は安定していた。変化の内容は、子どもや夫 (妻) イメージ、過去の自己イメージの肯定視の増加と対友人関係の肯定視の減少、未来の自己や生に対するイメージの否定視の増加であった。又、性差も5変数でみられ、老年期人格を考える上で、無視できない要因であることが示唆された。本研究の第1の目的として、今回は70歳から85歳の15年間における人格の安定性と変化を分析することをめざした。

次に、生存 (死) と心理的機能の関係において、老人の死に先立って起こる心理的变化の研究は、主に知能において行われてきた。これは、知能の終末低下研究として注目され、現在、知能の終末低下は死の3—10年前からおこることが結論づけられている (Johansson & Berg, 1989)。

一方、人格面で、知能と同様に死に先立って心理的变化がおこるのかどうかについては Lieberman (1965) が最初に着目した。彼は、死に先立つ心理的变化の研究を行う動機として、「ある老人ホームの婦長が著明な

身体的変化の現れる数か月前に、驚く程正確に居住者の死を予測したという観察から刺激をうけた」と述べている。そのため、彼は疾患にかかり身体的に衰弱してゆく時期ではなくて、死の前におこる心理的变化を測定するには老人の自覚度や意識レベルを測定するよりも投影法を用いるのがよいと考え、Bender-Gestalt テスト (BGT) と人物画を用いて施設在住老人を2年半に渡り3—4週間毎に追跡調査を行った。結果は、病気になること自体がテスト遂行の低下に影響を及ぼす単一の要因ではないことや死に先立って対処能力、自我エネルギー、自我の充実性といった自我機能が低下してゆくことをみだしている。

更に、Lieberman & Caplan (1970) は研究対象を在宅老人にまで広げて、情緒面の変化を Death near 群 (調査後12か月以内に死亡) と Death far 群 (調査後3年以上生存) で比較した。Death near 群は Death far 群よりも認知機能が低下し、情緒面が単純化し自己内省も少なくなる、自己イメージは自己主張や攻撃性が少なくなり、従順、依存的になる結果が示された。

Lieberman がみいだした受身的な人格特性は死の前兆としておこりやすいことは既に Nordini (1952) により指摘されていたが、Turner et al. (1972) も、施設老人の人格特性と適応の関係を調査した際に、受身性が老人の疾病、死亡と関係していることを報告している。

この特徴は前述したボン縦断研究において、生存と人格の関係を生存者と非生存者との比較から検討された際に、非生存者は活動性が低く、気分もおちるという類似の結果を得ている (Lehr & Schmitz-Scherzer, 1976)。

Shimonaka & Nakazato (1991) は、施設在住老人に Rorschach Test を用いた10年間の縦断研究を行い、その中で、追跡期間中死亡した老人の人格特徴も検討している。結果として生命力 (vital energy)、生理的活力、生産性の低下に伴う認知機能や自我の強さの低下がスコア上から示され、これらの特徴は自我機能の低下による受身性の増加を反映しており、Lieberman らの先行研究を支持していた。

同時期に発表された Hagberg et al. (1991) のスエーデン縦断研究では加齢による人格の安定性を Rodand-Frame テストを用いて、67歳の地域住民を83歳まで追跡した。結果は67—73歳の6年間で人格の安定性が示されたことと、もしこの間に、変化があった場合、それは83歳時の死を予測し、その場合の変化は場一独立性から場一依存性の方向であった。彼らは、独立一依存の人格次元の質や強さそのものが生存を予測

するよりも、むしろ独立—依存の人格次元の安定性／非安定性が重要であると論じている。

以上の生存や死と関係する人格機能の諸研究から死の予測に関して共通してみられた人格特徴は自己イメージが従順、依存的になり、受身性が増加するという変化であろう。これらの特徴の基盤には、生命力、生理的活力、環境に対処する能力等を包含する自我機能全般の弱体化が影響していることは大いに考えられることである。

長寿社会となり、とくに老年期が以前とくらべて伸長した現在、高齢期を快適に全うするためには、生存(死)と関係する人格変数を予測したり明らかにすることは心理学的観点から重要であると思われる。

そこで、本研究の第2の目的は先行研究から引きだされてきた生存や死と関係する人格の基礎をなす自我機能(自我の強さ)を取り上げ、自我機能の維持、或いは変化が人格のどの側面に影響をもたらす、生存や死を予測する要因となるのかを検討した。

方 法

対象者 小金井市在住70歳老人の総合健康調査プロジェクトに参加した小金井市在住の69～71歳の住民422名(男197,女225)である。

調査が行われた小金井市は、都心から約25km西に位置する郊外都市であり、市の中には公園、学校が多くあり、緑に囲まれ、東京の典型的なベッドタウンとして知られている。

調査は1976,1986,1991年に同一対象者に行われた。第1回調査時(1976)の総人口は、99106人でその内65歳以上の老人人口は5.3%であった。本プロジェクト研究の目的は身体、心理機能の老化プロセスや老化の促進要因をみいだすことであった。そこで、限られた資源と時間内で最大の研究効果を得るために単一年齢(70歳)の老人を対象に選んで、長期にわたる縦断調査を行うことにした。つまり心身の老化度を規定する最も基本的な条件である暦年齢を一定にすることにより、均質な老人集団に関する資料を得ようと計画されたのである。

しかしながら、通常、老年期の人々を対象とした縦断研究では、初回調査の対象者が長期間維持されることは少なく、死亡や病気等で減少するのは避けがたいことである。しかも、この減少は選択的減少(selective attrition)と呼ばれ、ランダムではない、つまり、弱い人がドロップアウトし、活動的で知的に優れた協力的な人が最後まで調査に残る。結果として、縦断的デー

タの加齢による低下を小さくすることが知られている(Botwinick, 1977)。

本研究も1976年の第1回調査では、小金井市在住の69—71歳の該当者数、970名中、422名が本プロジェクトに参加し、その内の330名から心理テストのデータが得られた。しかし1986年、1991年と追跡期間が長くなるにつれて死亡、転出等で対象者数が減少してゆき、1991年時の調査で面接が可能であった者は133名(男44,女79)であった。対象者のドロップアウトの人数は15年間で、死亡150名、転出34名、入院13名となった。尚、面接が可能であった133名中、123名から心理テストのdataを得ることができた。しかしながら、15年間3度の調査を完遂できた者は123名中90名(男32,女58)となり、本研究の目的1)での分析はこの90名を対象として行われた。

対象者の学歴は、男性の50.0%は旧制大学卒で占めており、また女性の51.2%は旧制女学校卒である。男女ともに高学歴者が多く、老年期の代表サンプルとはいえず、この限界を考慮に入れて本データをみてゆく必要がある。

対象者の70から85歳にかけて職業の変化を見ると、男性では70歳時42.0%が引退しているが、85歳時では、76.0%と増加している。女性の場合、70歳時84.5%、85歳時97.6%と大部分の者が職についていない。

配偶関係の変化では、70歳時配偶者有の率は男性90.0%、女性50.0%、死亡は男性8.0%、女性46.4%であるが、85歳時では配偶者有の男性は78.0%、女性は13.0%であり、死亡は男性22.0%、女性81.0%となり女性は15年間で夫を失った者が増加している。

家族形態の変化は70歳時、一人暮らしは男性30.0%、女性28.6%、夫婦のみ男性32.0%、女性15.5%、子と同居男性34.0%、女性52.4%である。85歳では一人暮らし男性2.0%、女性16.7%、夫婦のみ男性42.0%、女性7.1%、子と同居男性52.0%、女性73.8%である。15年間で男性は一人暮らしが減り、夫婦のみと子と同居が増加している。女性は一人暮らしと夫婦のみが減り、子との同居が男性よりも多い。

対象者の日常活動状況はADL(日常生活動作能力: Activities of Daily Livingの略)より測定された。ADLは老年者の健康度を表わし、生活の自立の程度を測定するものであり、歩行、食事、排泄、入浴、着脱衣の項目からなっている(芳賀ら,1988)。70歳と85歳時のADLの総合得点は15年間で有意な低下が示されていた($t=6.44$, $df=133$, $p<.001$)。

測定材料 本研究では目的1と目的2を分析するに

TABLE 1 各項目の性と変化要因のくり返し分散分析のF値

自由度	性 (1,88)	変化 (2,87)	変化×性 (2,87)	変化 傾向分析
たいていの家庭に比べると私の家庭は…	0.04	0.18	0.21	
家の人々は、私を…	9.17 ** 男<女	3.29 *	2.99	6.39 * 一次
私の子どもは…	0.20	3.63 *	0.28	5.16 * 一次
妻(夫)と私は…	16.81 *** 男>女	1.35	1.23	
人とのつきあいは、私にとって…	4.13 * 男<女	3.67 *	0.35	5.36 * 一次
私はよく人から…	1.31	0.29	2.82	
私とよく気の合う人々は…	0.73	4.50 *	3.06	9.11 * 二次
これまでは…	0.04	6.50 **	2.16	11.67 *** 一次
私のからだは…	0.38	0.90	1.26	
今の私は…	7.50 ** 男<女	2.92	2.58	
時々、私は…	5.03 * 男>女	0.47	1.52	
いつかそのうち、私は…	0.14	8.70 ***	0.92	17.33 *** 一次
生きるということは…	3.20	1.22	0.99	
死というものは…	0.50	2.26	2.26	
私の人生は…	0.02	0.22	3.88 *	4.43 * 一次 (女性)

* $p<.05$; ** $p<.01$; *** $p<.001$

あたって2つの心理テストを用いた。1つは下仲と村瀬(1975, 1976, 1980)が、老人が自己についての心理特徴を投影するように作成した老人用文章完成テスト(以降SCTと記す)を用いた。本SCTは33項目からなり、家族関係, 対人関係, 自己概念, 価値観の次元から構成されている。今回の分析ではその内の15項目を選択して用いた(各刺激項目はTABLE 1に提示した)。反応は判定のマニュアル(下仲, 1988)に従って基本的には肯定, 否定, 中立, 両価的, 無反応, その他に分類された。反応の分類は, 2人の判定者が各反応を独立して判定し, 判定者間の一致率は87.0%~100%の範囲であり, 平均は94.4%となりかなり高い信頼度がえられている。

次に統計分析を行うために, 肯定に+1, 否定に-1, それ以外の反応を0とスコアした(Shimonaka & Nakazato, 1980)。

2つ目は自我機能の測定として, Barron(1953)の68項目からなる自我強度尺度を小川(1965)が日本人に適用できるように改訂した35項目の尺度(満点35.0)を用いた。本尺度は①身体の機能と生理的安定性, ②神経衰弱と引きこもりがちの傾向, ③現実感覚, ④自己適応感と物事に対処する能力, ⑤幼児的不安, ⑥その他の下位領域からなっている。

調査方法及び時期 1976, 1986, 1991年の調査は基本的には会場を設定し医学, 心理学, 社会学からなる総合調査を行う中で, 心理テストは自己記述式と面接にて行われた。

結 果

目的1) SCT からみた人格の15年間の安定性及び変化について

SCTにおいてスコアされた得点は, 変化(3測定時点)と性の反復測定による分散分析が行われた。TABLE 1は分散分析のF値を示したものである。15項目中6項目に変化の主効果が示され, 5項目に性の主効果が示された。変化と性の交互作用は1項目のみであった。FIGURE 1は各SCT項目における変化と安定性を図示したものである。以下に有意な変化及び性差が示された項目結果を述べる。

家族関係: 家族関係において, 肯定的な家庭イメージ(たいていの家庭にくらべると, 私の家庭は…)の維持と肯定的な方向への変化の両方が示された。家庭内における自己認知(家の人々は, 私を…)と子どもイメージは共に一次曲線が当てはまり, 加齢と共に肯定視が強まっている。家庭内における自己認知イメージでは有意な性差があり, 自分が家族から尊敬されたり大切にされていると認識しているものは女性が男性よりも多い。配偶者と自己のかかわり(妻(夫)と私は…)では性差があり, 配偶者と自分のかかわりを肯定的にみているのは男性が女性よりも多かった。

対人関係: 対人交流(人とのつきあいは, 私にとって…)では経年変化と性差が有意であり, 変化の曲線は一次曲線が当てはまり, 肯定反応が徐々に低下している。ま

FIGURE 1 SCT 項目における15年間の変化と安定性

た反応は女性が男性よりも多い。次に、友人イメージ(私とよく気の合う人々は…)も加齢変化が示された。変化の曲線は二次曲線が当てはまることが示された。友人

イメージの肯定反応は70歳と80歳間で徐々に低下するが80歳と85歳では上昇している。

自己概念と価値観：過去の自己(これまでは…)と未来

の自己（いつかそのうち、私は…）で変化の主効果が示され、共に一次曲線が当てはまった。過去の自己は年齢が上がるにつれて肯定反応が増加しているが、未来の自己は70歳時の肯定反応から80、85歳になるにつれて自己の未来を老化や死といった否定的な内容でみている反応に変化している。現在の自己（今の私は…）では性差が有意であり、女性が男性よりも肯定反応が多かった。自己の内的感情を投影する反応（時々、私は…）では、男性は女性よりも肯定的な反応が多かった。

価値観では人生に対する態度に変化と性の有意な交互作用が示された。傾向分析を行った結果、女性での変化が有意であり、一次曲線が当てはまることが示され、それは加齢と共に肯定的になっていた。

目的2）生存（死）を予測する自我の強さと人格特徴

70歳から80歳にかけての自我機能の維持が生存を予測するかどうか、また自我機能の維持及び低下は人格のどの側面にどのような影響をもたらすのかを検討するために以下の手続きに従い分析した。

まず、70歳時と80歳時の2時点の自我の強さ得点（Ego strength—以下 Es 得点と記す）データがそろっている196名に対して、対象者の70歳時の Es 得点を中央値（25.0）で高い群（26-35点）と低い群（0-25点）に分け、70から80歳の Es 得点の変化から4群（高—高、高—低、低—高、低—低）に分類し、各群間で15年以上生存した人と10年後（80から85歳の間に）死亡した人の対数線型分析を行った。結果は高—低群のみの標準効果（ $Z=2.824, p<.01$ ）が有意となり、10年後に死亡した人が他群（高—高、低—高、低—低）よりも多いことがみられ、自我の強い、弱いという質のレベルよりもマイナスへの変化が生存や死の予測に影響することが示された。この結果は序論と目的で述べた、Hagberg らの先行研究と一致するものであった。

次に、自我機能の維持と低下が SCT から測定された人格機能のどの側面に影響をもたらすかの分析を行

FIGURE 2 70-80歳における自我の強さの維持と低下と生存率の関係

うに際して、Es 得点と SCT のデータが70歳と80歳の2時点共にそろっている対象者（168名）を70歳時の Es 得点とくらべて80歳時の Es 得点に低下が認められた群（ $N=66$ ）と低下が認められなかった群（ $N=102$ ）に大別して、前分析と同様に15年以上生存した人と10年後（80-85歳間）死亡した人の χ^2 検査を行った所、有意差が示された（ $\chi^2=5.623, df=1, p<.05$ ）。

FIGURE 2 は、70-80歳における自我の強さの維持群と低下群における15年以上生存した人と10年後死亡した人の分類を示したものである。Es 維持群では生存群が多く、低下群では死亡群が多い。

自我機能の維持と低下と人格との関係は、70歳と80歳時の Es 総得点を共変数にして、15の SCT 項目の70歳と80歳のスコア得点と性を要因とした反復測定による分散分析を行った。

結果は共変数として70歳と80歳時の Es 総得点を control したにもかかわらず Es 総得点の変化が有意に影響を及ぼした SCT 項目は、身体的自己（私のからだは…） $F(1,165)=6.35, p<.05$ 、他者からみられる自己認知（私はよく人から…） $F(1,165)=6.00, p<.05$ 、現在の自己（今の私は…） $F(1,165)=4.09, p<.05$ であった。FIGURE 3 は自我機能の維持群と低下群の3つの SCT 項目の10年間（70歳から80歳）の変化を示している。自我機能の低下群が他者か

FIGURE 3 自我機能と維持と低下に関する SCT 項目の10年間の変化

らみられる自己認知、身体的自己、現在の自己の肯定反応が減少していた。

考 察

1) 人格の安定性と変化について

70歳から85歳にかけて自己の家庭の価値が老人にとって重要なものであることが家族関係の結果より示唆された。本対象老人の家族形態は、70歳から85歳の15年間で一人暮らしが29%から11%に減り、一方子どもとの同居が46%から66%に増加している。一人暮らしの減少は男性に顕著であり、一方子どもとの同居の増加は女性が多い。

老年期では高齢化してゆくにつれて介護が必要になってくる人が多くなる。また、子ども側も老いた親を1人で住まわせておくことに心配して、子どものほうから同居をすすめる場合もある。老人自身も子や孫と一緒に生活することを望んでいる者も多い。わが国で行われた老後の生き方の意識調査(NHK 世論調査部編, 1985)では、子どもや孫と和やかに暮らすのがいいとする志向は、老人が若い世代にくらべて多く、かつ男性よりも女性のほうが多いことが報告されている。

問題と目的で紹介した Field と Millsap の縦断調査では、調和性が 60—70代前半から70代後半—80代にかけて上昇し、次の85歳以上の超高齢期で維持されていた。彼らは、調和性の内容に子や孫を大切に思い、子らと折り合い、受け入れるという項目が含まれていることから、この発達的変化の現象を Erikson(1950, 1986)の老年期の発達課題である統合性の達成と中年期の生殖性の要素が共に機能しており、老年期において加齢と共に子ども達に対する意味づけが変わってゆき、子らと折り合ってゆく過程があらわれているのかもしれないと述べている。

本対象者は70歳から80歳にかけて子ども家族と暮らす者が多くなっているが、本結果で示された肯定的な家庭イメージの維持、家庭内における肯定的な自己認識や肯定的な子どもイメージの増加は彼らが家庭で調和性を発達させながら、家族と折合い、その中で安定をえているとも解釈されるかもしれない。

次に家族関係における性差として、配偶者と自己とのかわり方は男性が肯定的にみており、一方、家庭内における自己認識では女性の方が肯定的にみられているとの認識が強かった。この結果は、男女老人で家族や親子関係の加齢変化が異なることが影響していると考えられ、ひいては、依存や介護の対象が異なることに結びつくことが推察された。

すなわち、老年期における親子関係は対人関係の変化と結びついて質が変わってゆくことが指摘されている(Kahn & Antonucci, 1980)。とくにわが国の男性の場合、加齢と共に、家族・親子関係が縮小してゆくが、女性は逆で、家族・親子関係は拡大してゆく場合が多いことが報告されている(東京都老人総合研究所, 1991)。

一方、わが国では、男性は女性よりも配偶者に依存する傾向が強いことが指摘されている(祖父江, 1973)。老人の生活と意識に関する国際比較調査(1992)結果でも、介護を望む相手として日本の老人男性は配偶者を、老人女性は同居している子どもをあげている。

このように、男性老人が家族・親子関係の縮小にかわって配偶者に依存することができるのは、明治生まれの人達の時代背景に基づいた役割や立場—妻は夫に従い、世話をするという関係—が老年期に至った現在においても夫にとって都合のよい形で維持されていることを示唆している。

これに対して、女性老人は加齢と共に配偶者に先立たれる者が多くなる。本対象女性老人も85歳時、81%の者が未亡人となっているが、男性は22%にすぎない。ほぼ同時期に老年者と子ども夫婦間のソーシャルサポートの授受について調査された結果では、高齢になるほど老人はサポートの提供者から受領者になることが示された。また女性のほうが子や嫁にサポートを提供するよりも、逆に多く受領していたことも示された(河合と下仲, 1992)。男性は老後、妻に頼ることができるが女性はそれができず、子ども家族に頼り、現実面で子ども家族から依存することが許容されていることが結果より推考されるのである。

老年期では定年退職、身体的老化や病気の発現、友人や親類等の死等により社会的ネットワークが徐々に縮小してゆきやすい。本結果において対人交流に対する肯定的な感情は加齢と共に縮小していることや友人イメージが70—80歳にかけて減少していることに対人交流の縮小が示されている。しかしながら、他者からみられる自己認知は、15年間、肯定視を維持していることや友人イメージが80—85歳にかけて中立の見方から再び肯定的反応へと変化していた。これは加齢とともに配偶者や親類のみならず、友人の死によって対人関係の質が変化してゆくことを経験するなかで残された数少ない友人が人生の満足感をもたらす重要な要素となっていることを反映していると考察される。

次に、対人交流では性差があり、女性が男性よりも肯定的反応が多かった。定年退職後の対人関係の性差特徴として、男性は家族・親子関係に加えて友人関係

も縮小するが、女性の場合は退職後、友人交流が増えることが報告されている(東京都老人総合研究所, 1991)。また、女性は男性にくらべて友人や近隣の人から情緒的サポート(例. 心配事や悩み事を聞いてくれる, 元気づけてくれる)を多く受けている(野口, 1991)ことも明らかとなっている。本対象者の場合、とくに女性の対人交流の範囲は若い頃から家族や地域の近隣関係が中心であり、その質は中年期から老年期にかけても男性程大きく変化していない。これは方法で述べたが、本対象女性の80%以上が職業についていない(主婦)ことからいえる。前述したように女性は加齢とともに配偶者を失う機会が多くなるが、女性の多くはこうした状況をのりこえてゆくために遠くの親類よりも近くの他人の諺のように、友人達との交流を支えとしていることが推考される。

自己概念の生涯発達研究は古く、1960年代から着手されているが、主に、横断的手法を用いた研究が多く、一致した見解は示されていなかった。近年では自己概念を生涯を通して多次元的にみようとするアプローチが行われ、種々の次元で異なった発達、低下、安定が示されているが、相対的には安定した次元が多いことがみだされている(L'Ecuyer, 1981; Mortimerら, 1982; Monge, 1975)。

本研究の自己概念の次元において、われわれの得た結果では過去、現在、未来の自己の変化は一様でないことが判明した。また身体的自己や現在の自己において肯定視が維持されていたことが注目された。

一般的に、身体的自己は老年期に入ると老化の影響をうけやすいことが予想されるが、横断的研究からは老人は若者よりも否定的な body image をもたないことがみだされている(Plutchikら, 1971, 1973)。

遠藤(1981)は身体的自己は自分の体についての同一性感であり、自己概念の重要な一部をなしていると述べているが、本対象老人の身体的自己が高齢にもかかわらず安定していることと現在の自己の肯定視の安定は一体をなして表明されたと考えられる。

これに対し、過去の自己は加齢と共に肯定視が強くなり、一方では未来の自己は自己の肯定視が低下していった。

Markusら(1987, 1991)は自己概念の構造モデルを提唱し、その中でとくに過去の自己と未来の自己を重要視している。過去の自己は老年学研究分野では回想あるいは人生回顧として概念化され、とくに老年者の場合には、自分の人生を統合し、それに意味を吹き込むものとして強調されている(Butler, 1963; Erikson, 1959;

Whitbourne, 1985)。

一方未来の自己は個人の未来における可能性を反映するものであり、老人は若者よりも未来の自己を多く述べないが、健康面に関する願望や志向性は多いことが報告されている(Hooker, 1992)。

Newman & Newman (1984) は、老年期の老人の課題は過去、現在、未来へバランスのとれたかわりが必要であるとする。すなわち、自分が過去に成し遂げたことを回顧し、受容することにより現在の役割を演じ、新たな問題を解決することができる。又、将来の人生のできごとについて予測することも重要となると述べている。

本結果では、前期老年期から後期老年期の移行につれて、過去の自己像は内容を見ると、客観的、否定的の見方から充実や安定視を述べた肯定的な変化が示された。また、将来の自己については自分の死や病氣・老化を言及している変化が示された。加齢と共に老人は過去の自己を受け入れると共に現在の肯定的な自己が維持されていることが示された。また自己の未来は広がり期待するよりも死を最終ゴールにすえていることが示された。これらの自己概念の様相は、Erikson 理論(1982)における第8段階の統合が、老年前期から後期にかけて達成されつつあることをうかがわせるものである。これは、価値の次元において生と死に対するイメージが運命として客観的に受け入れられていることから納得される。

尚、自己概念の性差については Bengtson ら(1985)は老年期では伝統的な性役割に沿った人格の性差が現れやすいことを指摘している。本結果にみられた女性老人の肯定的な自己の見方や自己の人生の肯定視の増加は、家族関係や対人関係においても自己を高く価値づけていたことと軌を一にしており、女性が70代から80代にかけて自己を縮小させずに上手に適応していることが示唆された。

以上、70歳から80、85歳にかけての人格の安定性と変化及び性差特徴を検討してきた。変化が示された諸側面は、家族形態や対人関係の量や質が年を取るにつれて変化してゆく現実面に合わせて自己を上手に変化させていっている部分と過去、現在、未来の自己を調和させて現在の自己の価値を維持させている部分であった。

又そのような傾向が女性に強くみられたことは1つには寿命の違いが影響しているように思われる。当時のわが国の女性の平均寿命が、男性が75.9歳であるのに対して女性は82.8歳である(1990年時点)。本対象女性

は男性が平均年齢よりも10年も長生きしている長寿者であるのに対して、現在平均寿命を越えて3年足らずである。女性の人格面での本格的な老化が始まるのは85歳をこえたこれからであるのかもしれない。

2) 生存(死)と関係する自我の強さと人格

70歳から80歳において自我機能を維持していた群は低下した群より15年以上生存した人が多く、低下群では80-85歳間で死亡した人が多かった。問題と目的で紹介した Lieberman の切迫死と心理的变化の研究では、死の6-9か月前にBGTでは模写のレベルにより測定される自我統合力の低下、図の大きさで測定される自我エネルギーの低下があらわれた。また、人物画では、絵の複雑さの減少で示される刺激を統合する能力の減少に向かう変化が認められた。これらは死に先立って自我機能、すなわち環境からの刺激を体制化し、統合する能力が低下するため、環境からの要請にうまく対処することができなくなると考察されている。

Shimonaka & Nakazato (1991) も心身共に健康な軽費(A型)と養護老人ホーム³居住者を対象にして、人格機能の加齢プロセスを研究するために10年間で計6回(2年毎)のロールシャッハテストを施行した。追跡期間中に人格の終末低下や切迫死との関係を分析し、人格機能の終末低下は死に先立つ4-6年前から起こり、生産的思考や物事に対する関心や興味が徐々に低下して現実との適切な結びつきが弱まり、この傾向は死直前に加速することがみられた。これらの人格変化に加えて、死直前(切迫死)では生命力、生理的活力、生産性が少なくなり、反応を統合する能力の低下や失敗に反映される自我の弱まりが示された。

本結果はLiebermanを始めとする先行研究の知見を自我機能と死を直接的に測定することにより検証した。さらに自我機能の安定及び変化は、他者からみられる自己認知、身体的自己、現在の自己に影響を及ぼすことが明らかとなった。これらの項目は、すべて老人の現在の自己イメージを測定しているものであり、自我機能の低下は身体的自己や現在の自己認識の肯定視を弱め、死と結びつきやすいことを示唆するものである。

本研究で用いたBarronの自我強度スケールは、身

体の機能と生理的安定性、神経衰弱と引きこもりがちな傾向、現実感覚、自己適応感と物事に対処する能力等の下位領域からなるが、先行研究で示された死と関係して低下する諸能力と一致する所が多い。とくに、環境へ対処したり、環境からの刺激を統合する能力、生命力や生理的活力等の自我機能の側面の低下は、常識的にも理解されるものであるが、本研究の15年間の縦断調査において確認されたことは興味深いことであった。

既述したように、対象者は追跡期間中、生活の自立度が低下した。これは現実面で身体面の老化が徐々におこり、それに伴って病気にかかったり、健康が悪化するという体験をしていることは当然予想される。しかしながら、Palmore (1982) は、25年間のDuke縦断研究において長寿を予測する要因を分析し、男女に共通して主観的な健康評価や健康満足度が実際の疾病状況よりも長寿を予測するという興味深い結果を得ている。

本結果の身体的自己は、日常生活における実際上の健康状態や病気に対するイメージのみを反映しているものではなく、自己概念の一部分として自己の体についての様々な主観的評価が含まれる。とくに自我の低下群で身体的自己の肯定視の低下が示され、それは85歳の死と関係することが示唆されたことはPalmoreの結果と表裏一体をなすものだろう。

次に、自己イメージは、死に近づくにつれて受身的、依存的な方向にむかう傾向が指摘されてきた。Hagbergらは67-73歳間で人格が独立から依存への変化は死と関係していた結果を、終末低下現象のあらわれととらえ、人格変化が生存の早期で敏感な予測要因となるかもしれないと推論している。

本結果では、70歳から80歳時、自我機能が安定している群では、他者からみられる自己認知と現在の自己の肯定視は一貫して変わらなかった。それらのSCTの内容にあたってみると、自分の行動や性格に自信があり、人から信頼され親しまれているという認識と幸せで、充実し、満足感をもった自己が述べられていた。

このように、SCTの内容からは受身的、依存的とは程遠く、自己に自信があり、充実した自己感覚が85歳の長寿を導くのかかもしれない。これはTroll & Skaff (1997)が、85歳以上の超高齢者の自己が変化するかどうかを縦断的(2年半)に調べた際にも、ほとんどの超高齢老人の自己についての感覚は変わらず一貫しており、たとえ変化した人でもそれは肯定的な方向であったことを報告しているのと同じ文脈内で結びつけること

³ 養護老人ホームは、身体上若しくは精神上又は、環境上の理由及び、経済的理由により、在宅で生活することが難しい65歳以上の者を対象とした施設である。

軽費老人ホームA型は、家庭や住宅等の様々な理由により入居を希望する60歳以上の者を対象にした施設であるが、入居は、施設と本人の自由契約により、又毎月低額の料金を支払う義務がある。

ができるだろう。

最後に、方法で指摘したように本研究の対象者は15年間の縦断調査に協力された方々であり、老年期の代表サンプルとするには限界がある。しかしながら、老人ホームなどの代表性に乏しい集団ではなく、対象者の地域性が特定されていることや基本的属性が明らかになっていることと、15年間追跡しえたことの意義は大きいと思われる。わが国の高齢化人口の増大と老年期のサクセスフルエイジングを考える時、生存—死と関係する人格機能が本研究で示唆されたことは、人格の生涯発達の最終期を予測する上で参考になると思われる。

引用文献

- Barron, F. 1953 Some test correlates of response to psychotherapy. *Journal of Consulting Psychology*, **17**, 235—241.
- Barron, F. 1953 An ego-strength scale which predicts response to psychotherapy. *Journal of Consulting Psychology*, **17**, 327—333.
- Bengtson, V.L., Reedy, M.N., & Gordon, C. 1985 Aging and self-conceptions : Personality process and social contexts. In J.E.Birren, & K.W.Schaie(Eds.) *Handbook of the psychology of aging*, New York : Van Nostrand Reinhold, 544—594.
- Botwinick, J. 1977 Intellectual abilities. In J.E. Birren, & K.W.Schaie (Eds.) *Handbook of the psychology of aging*, New York : Van Nostrand Reinhold, 580—605.
- Britton, J.H., & Britton, J.O. 1972 *Personality changes in aging : A longitudinal study of community residents*. New York : Springer.
- Butler, R. N. 1963 The life review : An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, **26**, 65—75.
- 遠藤辰雄 1981 アイデンティティの心理学. 4.自己と自我 遠藤辰雄(編) 大阪 : ナカニシヤ出版 Pp.45—50.
- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*. New York : Norton. (仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会 I みすず書房)
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York : International University Press. (小此木啓吾(訳) 1975 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房)
- Erikson, E.H. 1982 *The life cycle completed*. New York : W.W.Norton & Company. (村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房)
- Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H.Q. 1986 *Vital involvement in old age*. New York : W.W.Norton & Company. (朝長正徳・朝長梨枝子(訳) 1990 老年期 みすず書房)
- Field, D., & Millsap, R.E. 1991 Personality in advanced old age : Continuity or change ? *Journal of Gerontology*, **46**, 299—308.
- 芳賀 博・柴田 博・松崎俊久・安村誠司 1988 地域老人の日常生活動作能力に関する追跡的研究 民族衛生, **54**, 217—233.
- Hagberg, B., Samuelsson, G., Lindberg, B., & Dehlin, O. 1991 Stability and change of personality in old age and its relation to survival. *Journal of Gerontology*, **46**, 285—291.
- Hooker, K. 1992 Possible selves and perceived health in older adults and college students. *Journal of Gerontology*, **47**, 85—95.
- Johansson, B., & Berg, S. 1989 The robustness of the terminal decline phenomenon : Longitudinal data from the Digit-Span Memory Test. *Journal of Gerontology*, **44**, 184—186.
- Kahn, R.L., & Antonucci, T.C. 1980 Convoys over the life course : Attachment, roles and social support. In P.B.Baltes & O.G.Brim (Eds.) *Life Span Development and Behavior*, New York : Academic Press, **3**, 254—286.
- 河合千恵子・下仲順子 1992 老年期におけるソーシャル・サポートの授受 老年社会科学, **14**, 63—72.
- Kelly, E.L. 1955 Consistency of the adult personality. *American Psychologist*, **10**, 659—681.
- Kelly, E.L., & Conley, J.J. 1987 Personality and compatibility : A prospective analysis of marital stability and marital satisfaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 27—40.
- L'Ecuyer, R. 1981 The development of the self-concept through the life span. In M.Lynch, A. A. Norem-Hebeisen, & K.J.Gergen(Eds.) *Self-Concept*, Massachusetts : Ballinger Publishing Company, 203—218.

- Lehr, V., & Schmitz-Scherzer, R. 1976 Survivors and non-survivors-Two fundamental patterns of aging. In H.Thomae (Ed.) *Patterns of aging-Findings from the Bonn longitudinal study on aging*, Basel : Karger, 137—146.
- Leon, G.R., Gillum, B., Gillum, R., & Gouze, M. 1979 Personality stability and change over a 30-year period-Middle age to old age. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 517—524.
- Lieberman, M.A. 1965 Psychological correlates of impending death. *Journal of Gerontology*, **20**, 181—190.
- Lieberman, M.A., & Caplan, A.S. 1970 Distance from death as a variable in the study of aging. *Developmental Psychology*, **2**, 71—84.
- Markus, H.R., & Wurf, E. 1987 The dynamic self concept : A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, **38**, 299—337.
- Markus, H.R., & Herzog, A.R. 1991 The role of the self-concept in aging. *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, **11**, 110—143.
- Mortimer, J.T., Finch, M.D., & Kumka, D. 1982 Persistence and change in development : The multidimensional self-concept. In P.B.Baltes, & O.G.Brim, Jr. (Eds.) *Life-Span Development and Behavior*, New York : Academic Press, **4**, 263—313.
- Monge, R. H. 1975 Structure of the self-concept from adolescence through old age. *Experimental Aging Research*, **1**, 281—291.
- Newman, B.M., & Newman, P.R. 1984 *Development through life*. Illinois : The Dorsey Press.
- (福富 譲(訳) 1988 新版 生涯発達心理学 川島書店)
- NHK世論調査部編 1985 現代日本人の意識構造 日本放送出版協会刊
- 野口裕二 1991 高齢者のソーシャルサポート：その概念と測定 社会老年学, **34**, 37—48.
- Nordini, J. 1952 Survival factors in American prisoners of war of the Japanese. *American Journal of Psychiatry*, **109**, 241—248.
- 小川捷之 1965 自我の強さ(Ego Strength)の測定に関する研究—その1— 東京教育大学 教育学部紀要, **11**, 107—122.
- Olbrich, E. 1985 Coping and development in the later years : A process oriented approach to personality and development. In J.M.A. Munichs., P.M.Mussen., E.Olbrich & P.G.Coleman (Eds.) *Life-span and change in a gerontological perspective*, New York : Academic Press, 133—155.
- Palmore, E.B. 1982 Predictors of the longevity difference : A 25-year follow-up. *The Gerontologist*, **22**, 513—518.
- Plutchik, R., Weiner, M.B., & Conte, H. 1971 Studies of body image I : Body worries and body discomforts. *Journal of Gerontology*, **26**, 344—350.
- Plutchik, R., Conte, H., & Weiner, M.B. 1973 Studies of body image II : Dollar values of body parts. *Journal of Gerontology*, **28**, 89—91.
- Shanan, J. 1985 *Personality types and culture in later adulthood*. Basel : Karger.
- 下仲順子・村瀬孝雄 1975 SCTによる老人の自己概念の研究 教育心理学研究, **23**, 104—113.
- 下仲順子・村瀬孝雄 1976 加齢と性差よりみた老人の自己概念 教育心理学研究, **24**, 156—166.
- 下仲順子 1980 青年群との対比における老人の自己概念 教育心理学研究, **28**, 39—45.
- Shimonaka, Y., & Nakazato, K. 1980 Psychological characteristics of Japanese aged : A comparison of Sentence Completion Test responses of older and younger adults. *Journal of Gerontology*, **35**, 891—898.
- 下仲順子・中里克治・古谷野亘・柴田 博 1984 小金井市 70 歳老人の人格特徴 社会老年学, **20**, 24—34.
- 下仲順子 1988 老人と人格 川島書店
- Shimonaka, Y., & Nakazato, K. 1989 Personality development among the Japanese elderly : A ten-year longitudinal study on a Sentence Completion Test. *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, **4**, 347—356.
- Shimonaka, Y., & Nakazato, K. 1991 Aging and terminal change in Rorschach responses among the Japanese elderly. *Journal of Personality Assessment*, **57**, 10—18.
- 祖父江孝男 1973 日本の男性—比較文化的考察— 小林さえ(編) 男性心理学 朝倉書店 Pp.187

- 201.
 総務庁長官官房老人対策室(編) 1992 老人の生活と意識—第3回国際比較調査結果報告書 中央法規
 Thomae, H. 1976 *Patterns of aging-Findings from the Bonn longitudinal study of aging*. New York : Karger.
 東京都老人総合研究所 1991 定年退職に関する長期的研究 東京都老人総合研究所
 Troll, L.E., & Skaff, M.M. 1997 Perceived continuity of self in very old age. *Psychology and Aging*, **12**, 162—169.
 Turner, B. F., Tobin, S. S., & Lieberman, M.A. 1972 Personality traits as predictors of institutional adaptation among the aged. *Journal of Gerontology*, **27**, 61—68.
 Whitbourne, S.K. 1985 The psychological construction of the life span. In J.E.Biren & K.W. Schaie (Eds.) *Handbook of the psychology of aging* (2nd ed.), New York : Van Nostrand Reinhold, 594—618.
 (1998.8.6 受稿, '99.2.26 受理)

Personality in Old Age : Longitudinal Study of Personality Change, Ego Function, and Survival

YOSHIKO SHIMONAKA (TOKYO METROPOLITAN INSTITUTE OF GERONTOLOGY), KATSU HARU NAKAZATO (TOKYO METROPOLITAN INSTITUTE OF GERONTOLOGY, IWATE PREFECTURAL UNIVERSITY) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 1999, 47, 293—304

Purposes of the the present study were to investigate stability and change in personality among Japanese senior citizens aged 70, 80, and 85, using 15 SCT stems, and to analyze whether changes in ego function using Barron's ego-strength scale predict survival and are correlated with a change in personality. Of the original 422 participants, only 90 completed all 3 surveys over the 15-year period of the present study. Both considerable positive and negative changes were observed, as well as stability. The image of themselves in their family, relations with friends, their current self, and their view of their lives was more predominantly positive in women than in men. Positive family image increased with advancing age. Those whose ego strength was stable during their seventies showed a higher survival rate, while those with lowered ego strength had a higher mortality rate. Our results suggest that personality continues to develop even after 70 years of age, and that ego function influences the maintenance of current positive self-concept and survival.

Key Words : old age, longitudinal study, personality, ego function, survival, Japanese men and women 70-85 years old